2016

優秀作品集

心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

中学生部門

香川県知事賞

内閣府 佳作

三豊市立豊中中学校　一年　菅　花音

香川県

小学生部門

香川県知事賞

言葉の力

さぬき市立長尾小学校　五年　橋本　沙彩

私は、病気のため生まれつき足が悪いです。そのため、みんなと同じようにはできないことがいろいろあります。例えば教室のい動の時教科書やノートなどたくさん荷物を持って階だんをのぼったりおりたりするのは大変です。特に音楽室や、家庭科室にい動するときには、持っていく物が多いので大変です。

私が荷物をたくさん持っている時、友達が、

「持ってあげようか。」

と、声をかけて手伝ってくれました。私を気にかけてくれているのがとてもうれしかったです。少しでも楽になれるようにと思って声をかけてくれたのがわかって、とてもあたたかい気持ちになりました。

他にも、親切にしてもらった事がいろいろあります。ある体育の時間、マット運動の時私はできるかどうか不安でした。友達が、

「さあや、がんばって！。」

と、はげましてくれるので、私も「よし、やってみよう。」という気持ちになり、あきらめずにがんばりました。うまくできた時おうえんしてくれていた人たちが、

「よかったね。おめでとう！。」

と、よろこんでくれたので、私もうれしい気持ちになりました。みんながおうえんしてくれたおかげで、私もがんばろうという気持ちになれたのだと思います。

学校の先生や友達だけでなく、家族や病院の先生など、いろいろな人たちに私は助けられています。私が自分で少しいけないと思うところは、自分と友達を比べてしまうことです。自分には、友達と同じようにはできないことがいろいろあるので、ふ通にできる人と自分をどうしても比べてしまうのです。そうではなく、比べるのなら、昨日の自分と今日の自分を比べよう、「昨日はできなかったけど、今日はできるようになったなぁ。」とか、「毎日少しずつ成長しているぞ。」と感じながら、一日一日を大切にすることが大事なことだと知りました。たとえ最初はできないことでも、あきらめずにまずやってみること、そしてできるように努力することが大切なことなのです。そしてそんな時に先生や友達のやさしい言葉は私に大きな力や勇気をくれます。とてもあたたかい気持ちになります。

みんなが私をはげまし、ささえてくれるおかげで、大変だと思っていたことが大変ではなくなるのです。言葉の力ってすごいなぁ、と思います。

みんなが私をはげまし助けてくれるように、私もみんなが困っている時に助けてあげたい、力になってあげたいと思います。そのために今の私にできることは、思いやりのある、やさしい言葉で自分から声をかけることだと思います。自分もみんなもあたたかい気持ちになる言葉を選んで、自分からどんどん声をかけたいと思います。

中学生部門

香川県知事賞

内閣府　佳作

私のお父さん

高松市立国分寺中学校　二年　小早川　奈緒

平成二十六年十月二十六日、私のお父さんはくも膜下出血で倒れました。すぐに手術をしましたが、病院の先生には一生車いすの生活になるだろうと言われました。なかなか意識が戻らず、私はとても心配しました。毎日お母さん達と病院に通いました。いつ行ってもたくさんのチューブにつながれて、ただ眠っているだけでした。言葉を話す大切な機能が損傷している可能性があるとも言われました。話ができないということです。いつになれば目が覚めるのだろう、このまま目が覚めないかもしれない、目が覚めても私達のことを覚えているだろうかと不安でいっぱいになりました。

お父さんは、意識が戻ってもなかなか話すことができませんでした。私の言っていることがわかっているのかいないのか、それすらもわからない状態でした。話したくても話せないのかもしれないと思いました。さらに、左半身が麻痺しているようで手足が腫れて動かすことが難しい様子でした。

一カ月後、リハビリの病院に移りました。そこにはいろいろな障害のある人たちがたくさんいました。体の不自由な人、記憶の障害がある人、車いすの人、言葉を話せない人。毎日、時間を決めてリハビリが続きました。お父さんが話す練習や歩く練習をしているところを見ました。かすれた声で話すのがやっとのようでした。麻痺をした左足を動かすのがつらそうで、私が代わってあげたいと思いました。

それから私達はお父さんと交換日記をすることにしました。最初は何を書いているのかわかりませんでしたが、少しずつ読めるようになってきました。家族のこともしっかりと覚えていることに安心しました。「毎日リハビリをがんばってね。」と書きました。そんな生活が一年六カ月続きました。

退院の日、病院の先生からこう告げられました。「お父さんがここまで回復したのは奇跡だよ。」と。つらいリハビリを一生懸命したのでしょう。私は、よくがんばったお父さんを誇りに思います。今では、自転車に乗って通勤できるまでに回復しました。

しかし、お父さんには「高次脳機能障害」という後遺症が残ってしまいました。見た目では障害者とはわかりません。話をしても今までとほとんど変わりません。車を運転することはできないため、外出をすることも少なくなりました。お父さんができないことは私達家族が補い、協力して暮らしています。

この二年間で私の生活は大きく変わりました。そして障害者に対する考え方も変わりました。元気だったお父さんが障害者になったことで、今まで他人事だと思っていたことが決してそうではないと思うようになりました。お父さんも病気になりたくてなったわけではないし、その結果障害が残ってしまったことも本意ではなかったと思います。一度も弱音をはいたことはないけれど、私が考える以上にお父さんは努力してがんばってきたことでしょう。歩くこともできないと言われたお父さんが仕事に復帰できたことは、奇跡ではなく、きっとお父さんの努力が実った結果だと思っています。その努力を無駄にしないためにも、これからも私達家族でお父さんを支えていきます。

また、車いすの人や障害のある人を見かけたときには、見て見ぬふりはしないで、私にできるお手伝いがあれば進んでしようと考えています。これは、この二年でお父さんから学んだ大切な教えです。

私が最後に伝えたいことは、障害のある人も障害のない人と同じであること、そして誰もが障害者になる可能性があるということです。そして、障害者が住みやすい社会になっていくことを心から願っています。

小学生部門

香川県健康福祉部長賞

たかまつのおにいちゃん

丸亀市立飯山北小学校　一年　宇野　優輝

ぼくには、たかまつにいとこのおにいちゃんがいます。おにいちゃんは、しょうがいがあり、まい日くるまいすでせいかつをしています。おにいちゃんはふたごで、もうひとりのおにいちゃんはけんこうです。

ぼくは、まい月一かいはおにいちゃんとあいます。あうときは、しょくじかいをしたり、おかあさんのおじいちゃんおばあちゃんのおはかまいりにいったりします。

おはかまいりのとき、おにいちゃんはくるまの中からおまいりをします。なぜなら、おはかにはかいだんがたくさんあり、くるまいすではいくのがたいへんだからです。ぼくはスロープのあるおはかがいいとおもいました。おにいちゃんもいっしょにいきたいだろうとおもいました。また、おにいちゃんはおじさんとふたりでくらしています。でも月よう日から木よう日までしせつでねとまりしたり、しょくじをしたりしています。金よう日から月よう日のあさまではおうちにかえって、おじさんとせいかつしています。

おにいちゃんはしせつで、つけものやつくだになどをつくるさぎょうをしています。そのさぎょうをしたら、お金をもらえるそうです。おにいちゃんは、そのお金でぼくにおかしをかうといってくれます。また、たかまつにいったときはゲームをしたり、ビデオをみたりしてあそんでくれます。おにいちゃんはとてもやさしいです。ぼくは、おにいちゃんがだいすきです。

ぼくが五さいのときに、わかやまけんのアドベンチャーワールドというところに、おにいちゃんとおじさんとおおさかのおじさんとかぞくでくるまでいきました。そのときにきがついたのですが、こうそくどうろのパーキングでくるまをとめるときに、くるまいすのマークがちゅうしゃじょうにかいてありました。おじさんは、そこにくるまをとめておにいちゃんのおせわをしていました。そこは、ほかのところよりもひろくて、くるまいすののりおりがしやすいようになっていました。いまおもうと、しょうがいがあるひとにやさしいつくりだったとおもいます。ぼくは、おにいちゃんみたいなひとにやさしいまちづくりを大きくなったらしたいとおもいます。

小学生部門

香川県健康福祉部長賞

関わることで感じるやさしさ

香川大学教育学部附属高松小学校　五年
鈴木　櫻子

私が、今がんばっている事の中に、第九があります。もともと歌うということが好きだった私は、ピアノの先生に勧められて『香川第九合唱団』に入りました。そこでは、年齢や仕事などがいろいろな方と一緒に歌っています。

そのいろいろな方の中に、目の不自由な方がいます。合唱団の中ではベテランの方です。毎回練習している会場への道順などは慣れているので、なに不自由なくこられます。しかし、慣れない別の会場での練習の時は、困っているようでした。でも、ほとんどの人が気がつかないようでした。私は、その方をエスコートしてあげました。そのとき、自分でも不思議だったのですが、ごく自然に手をさしのべることができました。決して、慣れていたというわけではありません。多分以前、母が目の不自由な方をエスコートしているのを見たことがあったから、同じようにできたのだと思います。それに、なぜ大人の人が手をかしてあげないのか不思議に思っていたので、手助けできる機会があればしようと思っていたからかもしれません。

さらにもう一つ、そうできたことの理由があります。小さい頃から親しくさせていただいている人の中に、車イスに乗っている、下半身が不自由な方がいます。これは母から聞いた話ですが、小さい頃の私はその方を見て、「かっこいい。」と言っていたそうです。小さい頃のことなので、よく覚えていませんが、母がいうには、かっこよく車イスを操り、機敏で、なに不自由ない動きに感動していたということです。そういう小さい頃の思いが、自然に手をさしのべることにつながったのだと思います。

また、『車イスのおじちゃん』の家族と私の家族が一緒に外国に旅行に行ったことがありました。移動する時はバスに乗りますが、身体障害者用リフトのあるバスはありません。そういったとき、外国の方は、ふつうに「ヘイ、プリーズ！」と言ってみんなでおじちゃんをかかえて、バスのせまい入口のステップをかつぎあげてくれていました。そして、あたたかく声をかけてあげていました。私はこの時思いました。外国の方は心が広くてあったかいんだなあ。だからこの街のふんい気もなんだかやさしく感じるんだなあ。こんな風に人に対して自然にやさしくできるのは、すばらしいなあと思いました。そういうところは日本にはあまりなく、やさしくするのにも勇気がいるのかなと思いました。私は、このことから、障害があったり、育った国がちがったりしていても、だれとでも関われて、手をさしのべることができるようになりたいと思いました。そして、私のような考えの人が少しでも多くなれば、小さい頃、車イスのおじちゃんの家族と旅行した外国のような、障害のある方にもやさしい街になると思います。また、そのために友達やみんなに、このような話をしていきたいと思います。

私の好きな詩があります。それは、金子みすずさんの『みんなちがってみんないい』です。私がこの詩を初めて耳にしたのは、『にほんごであそぼ』というテレビ番組です。私がこの詩の中で一番好きな部分は、題名にもなっている『みんなちがってみんないい』です。理由は、目の不自由な方に自然に手をさしのべることができたことや、外国の方が車イスのおじちゃんに、あたたかく声をかけてあげていたという体験にもつながりますが、障害のある人や育った国がちがう人も、みんな一人の人間です。障害や国籍なども一人ひとりの個性であり、特徴ですから、それを受け入れる私たち次第である。というふうに感じ、私の心にひびいたからです。

私は、この『みんなちがってみんないい』という言葉を大切にしたいと思います。そして、第九の練習を始め、学校生活などで、障害のある方、外国の方などとのやさしい関わりを大切にしていきたいと思います。

中学生部門

香川県健康福祉部長賞

言葉を大切に

高松市立山田中学校　一年　大森　夏希

ぼくが、四才のときに亡くなった曽祖父は、幼い時の事故で耳が聞こえませんでした。

大きな農家でいつも忙しく、ろう学校にも行けず手話も習えないままでした。でも田んぼを耕す牛のあつかいは近所の誰より上手だったそうです。

「毎日の生活でわかりあえないことばかりで大変だったけど、思いやりのある優しいひょうきんな人だった。」と話す祖母。

そんな祖母から、よくしかられる事があります。

それは、ぼくが弟達に良くない言葉を出す時です。

「亡くなったひいじいちゃんは、みんなといろんな話をしたかったはず。夏希は耳も聞こえ話もできるんやから喜ばなあ。いい言葉で話さないかんのよ。いやな言葉出しとったら今度は自分に返ってくるんで。」と。

確かに、人に何かたのむ時も悪いなあと思う気持ちを持って言葉を出すと優しく受け入れてくれたり、「だいじょうぶ？」と気を使ってあげたら笑顔が返ってきたりしたこともあります。たいしたこともしていないのに「ありがとう。」と言われたらすがすがしい気分になったりします。

反対に、なごやかな楽しい時間は、考えなしに出された言葉で壊されてしまう時もあるのです。

この間、お笑い芸人が「こら！」と言いたいほど、腹立たしい時、語尾にビブラートを付けて伸ばすとソフトに聞こえるものだと言っていました。実際に僕もやってみると確かにソフトに聞こえました。

言葉ってすごいなあ。

人間にだけ与えられたもので、出し方次第で良くも悪くもなります。

人を喜ばせたり勇気づけたりする事に使ったら、いじめなんか無くなるだろうなあ。

みんなおだやかでストレスの無い生活ができるでしょう。

少しオーバーだけど戦争もなくなるのではと考えます。

そして、言葉を使ううえでもっとも大切なのは、その言葉を使う人の気持ちや意思がどこにあるのかということです。僕が弟にいやな言葉を使うときは弟の気持ちを考えていないことが多いです。言ってしまった後は、自分も嫌な気持ちになります。逆に相手に感謝の言葉を伝えるときには、相手に対する感謝の気持ちがあったり自分も気持ちよくなっていたりします。つまり、言葉を大切にするということはまわりの人を大切にすることと同じだということに気づきました。

祖母はよく曽祖父の話をします。ぼくは何度もその話を聞きました。そして、そこから祖母のぼくに対する願いを感じるようになりました。ぼくをひざに乗せた笑顔のひいじいちゃんの分も言葉を大切に周りの人を明るくできる自分になりたいと思いました。

中学生部門

香川県健康福祉部長賞

僕の兄

高松市立山田中学校　三年　吉村　勇輝

僕には二歳上の兄がいます。兄には障害があります。兄は僕には思いつかないような行動をとります。例えば、急に家から飛び出したり、テレビを消したりチャンネルを変えたり、テレビのコンセントを抜いたりします。僕には兄のしようとすることがよく分かりません。

兄は母にも僕にも理解できない行動をします。例えば、体調が悪くて寝ていたのに、花火を見に行きたいと言ったり、何かのパンフレットが欲しいと言って親を連れて行こうとしたりすることです。家族の大事なものを奪ったり隠したりすることもあります。

しかし、悪いことばかりしているわけではありません。母にコーヒーを入れてあげたり、部屋の片付けをしたり、ゴミを出したりします。たまにいいことをしたり、気がきくことをしたりします。

僕には兄の行動がいまだに理解できません。腹が立つことも多いし、よくけんかします。そこで、今回は兄の気持ちになって兄の「理解できない」ことについて考えてみたいと思います。

まず、兄は言葉で気持ちを伝えることが難しいです。気持ちを伝えたいときは紙に書いたりすぐに行動に移したりします。そして気持ちが伝わらなかったり、行動を止められたりすると、叫んだり泣いたり暴れたりします。もし僕が兄の立場なら、どのように伝えられるのでしょうか。僕だって気持ちが伝えられずに、暴れたりするかもしれません。兄が特別ではないのです。

ほかにも兄はスマートフォンで同じ動画を見たり、スーパーに行ったときに商品を勝手に並べ替えたりします。たぶん、兄なりのこだわりがあるのでしょう。僕にも兄とは違うけれどもこだわりがあります。例えばラーメン屋に行ったら決まったラーメンを食べるというこだわりです。僕は人に迷惑をかけないこだわりなら、誰にも止められたくないです。でも兄は理解されないこだわりだからと止められてきたことがよくあります。それはすごくつらいことだと思います。

兄は自由にお金を使うことができません。僕たちのようにおこづかいをもらって欲しいマンガやお菓子を買うことができません。確かにお金を自由に使ったら無駄な物を買ったり、危険なことに巻き込まれたりするかもしれません。しかし、すごく不自由だろうと思います。

僕はふつうに遊びに行ったり、自由に外出できたりしますが、兄はそれができません。僕は行きたいときに行きたいところにいけるのが当たり前だと思っています。でも兄はその当たり前ができないのです。

でも、兄はいつも笑って楽しそうに暮らしています。僕には理解できない違った考えをもっていても楽しめていると思います。そして、兄は僕からしたら不自由なことが多いけれども、母をはじめとしたいろいろな人が兄を守ってくれています。

今回は兄について自分の考えをまとめましたが、社会には障害のある人々がたくさんいると思います。きっと兄のように理解されにくいことがたくさんあると思います。僕が兄を大切に思うように、障害をもつそれぞれの人たちにも家族がいて、大切に思っていると思います。

僕も今回、兄についていつもは考えないことを考えるいい機会になりました。けんかもするし、悪口も言うことがあるけれど、僕の大切な兄です。僕は兄をもっと理解して、もっと近づいていきたいです。そして、兄の力になりたいし、兄と支え合って楽しく生きていきたいです。

小学生部門 審査員特別賞

さぬき市立長尾小学校　六年　福積　陽菜

障害者への偏見をなくすため知る

私は、小学二年生の時東部養護学校の人との交流をしました。長尾小学校の体育館で自分たちでおもちゃを作り養護学校の人たちに遊んでもらう時私は養護学校の人たちに楽しんでもらえるように工夫しながらおもちゃを作りました。私のグループはボウリングを作りました。あまり力がなくてもできるようにボールを紙で作ったり、ピンをペットボトルで作ったりしました。また、そのペットボトルをテープでかざったり、ビーズを入れてたおれたら音がしたりするようにしました。そして、ペットボトルをたおせた人には、折り紙のメダルをあげました。たおせなかった人には、ひまわりや風せんなどのおり紙をあげました。私が思うにきっと養護学校の人には喜んでもらえたと思います。このように、人が喜んでくれるように工夫をたくさんしたのは人の事を思い合う心の輪だと思います。東部養護学校へ私たちが行った時は、学校のことを教えてくれました。そしてプレゼントにまわるおもちゃをくれました。そのおもちゃは今でも、持っています。風を受けるとまわって色がぬられているのでまわると明るく、きれいです。真ん中のところがキャラクターの絵になっていて、かわいかったです。もらった時は、とてもうれしかったのを覚えています。

私は、今まで正直、障害者の人に少し偏見をもっていました。でもそれは、自分が障害者の人たちのこともよく知らなかったからだと思います。ですが、東部養護学校の人たちとの交流をしてからは、障害者のことをよく知れたように思います。まだ知らないこともあります。でも、知ろうとすることが私は大切だと思います。障害のある人も同じ人間です。心の輪をつなげ心の交流をして相手のことを思うこと、それが障害者の人への障害のない人が偏見をなくす方法の一つだと思います。そのために、これから私ももっといろんな人と交流して、いろんな人のことをもっと知ろうと思います。

中学生部門 審査員特別賞

香川大学教育学部附属高松中学校　三年　森長　周平

同情はいらない

最近よく、リオデジャネイロオリンピックの話題を耳にする。選手たちの大健闘によってたくさんのメダルがもたらされ、日本が歓喜にわいた。注目すべきはオリンピックだけではない。障害者たちのスポーツの祭典、パラリンピックである。しかし、驚くことにパラリンピックの注目度はオリンピックに比べると圧倒的に低い。これはやはり障害者と健常者の間にまだ大きな壁があるということなのであろう。「NHK」ですらパラリンピックを放送する機会は少ない。障害者にここまで興味を示さない国も珍しいだろう。最近になって障害者に対する世間の見方も変わってきている。マスメディアで、障害者についての感動的な話が紹介されたり、バリアフリー化が進んだり、障害者手帳の制度がつくられたりと、障害者に対する対応もどんどん進化してきている。

以前、障害を持った方の講演を聴いたことがある。その時彼は、「障害者」という言葉ではなく、「ちょう壁者」という言葉を使っていた。壁に挑む者、壁を越える者、様々な意味を持っている。自分の限界を越えて、できていることを増やしたいという思いがひしひしと伝わってくる。彼は自分が障害を持っていることでなく、普通の人とは違うというレッテルを貼られることに悔しさを感じているのだと言っていた。自分も、他の人と同じように扱ってほしいのだ、と。

障害を持った方々が本当に望んでいることは、世間から憐れみの目で見られることでも同情してもらうことでもない。それは普通の人と同じように接してもらうことだ。「障害」という言葉自体、彼らを自分とは違うという目線で見ている決定的な証拠である。そういった考え方から変えることは不可能に近いことである。しかし、接し方を変えること、障害者に対する自分の古い観念を改めることはたやすいことだと思う。障害者にできて健常者にできないことだってたくさんある。まずはパラリンピックにもっと関心を持ち、障害者に対する自分の考えを変えることから始めていきたいと思う。全ての人が平等に扱われる未来のために。

高校・一般部門

審査員特別賞

思いっきり自由を夢見て

坂出市　A・M

私は今、障害者のグループホームで生活をしている。

ここでの生活をするきっかけは、高校一年の時の風邪症状で内科を受診したことから始まった。風邪かな?という思いと別に、今まで体験したことのない苦しさが襲ってきた。

その夜、パニック過呼吸を発症、何が何だかわからないまま、とにかくしんどい、誰でもいいから助けてと声にしたことを覚えている。

朝を待って内科医へ行ったところ、ここでは診れんと言われ地元の総合病院へ搬送されメンタルヘルス科へ即入院となった。点滴を受け深い眠りに入ってしまった。ここからが地獄のような治療の始まりであった。このような状態が一週間も続き、この時から、はっきり言って人間らしい感情は薬によって奪われてしまった。

三か月ぐらい入院をし、少しずつ外出を繰り返しながら、やっとの思いで病院から学校へ通えるまでに回復した。

しかし、学校へ行くと元気だったころの感覚を取り戻すには時間がかかった。でも友達に恵まれていたことからすぐに元気になり退院の許可がおり、電車通学できるまでトントン拍子によくなった。薬も軽くなり、体調も良くなったので服薬も自ら止めた。その結果、恐れていた再発と社会の病気に対する偏見に出会った。介護福祉士となった私に人間関係がバリアになった。病気は気持ち次第、病気は気からと自分に言い聞かせながら、薬に頼った。しかし、いくら忘れずに薬を飲んでもよくならない。此の頃、人間恐怖症も味わった。不安を訴えればその都度薬は増える。仕事をしなければという気持ちと副作用の戦い、もう嫌でどうにもならない状態に陥った。自分の気持ちのコントロールの戦いにも疲れ、もうどうしたらいいのかわからない状態になり、「なんで私が、なんで私ばっかり、何で、何で」との疑問、体のしんどさと何をどこにぶっつけたらいいのかわからない苛立ちで、手当たり次第に物や人に当たり散らした。犠牲になったのは一番に家族であった。ただただ普通のごくごく普通の暮らしがしたかった、このとき本当にあがき苦しんだ。

此の頃気が付いたのが、一番理解してほしい身内の無理解、そして、周囲の差別、もっと私のこの苦しみをわかってほしいと思っても無理なこと等などである。最終的には自分のことは自分にしかわからないということだった。親元から離れて生活することで、新たな自分を探そうという気持と、また、主治医の勧めもあって、グループホームでの生活を選択した。

グループホームでの生活も最初からいいスタートが切れたわけでない。私は自分の気持ちをコントロールするのが大の苦手で、そのうえ人見知りや緊張を人一倍するタイプである。入所当時は、相当しんどくて気疲れしたのを覚えている。「なんでこんなところに来たんやろう、もう嫌や」と泣いてばかりの日々。だれも私のことわかってくれんやろうな、家族からも連絡はないし、友達とも連絡が取れないし、思うこと思うことがすべてマイナス思考のうえ、体調も悪くなっていった。何回泣いたことか。その都度、何回も職員を困らせたことか。

せっかく退院したのにこんなに辛いことの毎日なんやろう、しかし、職員は手こずらす私に対して、見捨てたりはしなかった。気分転換にドライブに連れ出してくれたり、瀬戸内芸術祭に連れて行ってくれた。親子関係も職員の促しが温かく、少しずつ円満になってきたような気がする。

私は今、作業所へ通所しながら地域活動支援センターにも時々参加している。支援センターでは、土・日・祝日以外は、毎日午前と午後に二時間ずつのプログラムがある。いつ誰がどこに参加してもいいことになっている。私にはまだ気分の波があり、その日、その時の気分によって左右されている。職員はそんな私を大切に受け入れてくれている。今は主に、みんなと外出をしたり、ゲーム・笑いヨガ・フットケアのプログラムに参加している。笑いヨガは思いっきり声を出して笑えるのでいいと思う。またここではピア・サポートの会があって、ピア・サポーターが中心になって、参加者からの悩みを聴いて、それに対しての意見交換をしている。みんな真剣に聴いて、自分たちの経験から得た意見を積極的に述べている。この会では、発症時のことやその後の入院体験、その辛さ、悔しさ、家族関係、仕事、薬に対する抵抗などを大っぴらに話し、共感し合ったり、アドバイスをし合っている。たくさん仲間がいること、みんないろんな体験をしながら、そして、今なおいろんな悩みを抱えながら生きていることを知った。

今はこうした生活を送っているが、将来は就労を考えているし、いろいろな人との交流を通して、以前の自分に戻りたいと考えている。しかし、薬は一生やめるわけにはいかない、何時また発症するかもわからない体で、どこまで健康な人に交じって生活ができるかと言われれば自分でもわからない。

また、精神障害は身体障害や知的障害と違って、一般の人たちからは遠ざけられているような気がする。いわゆる偏見である。この偏見は健常者に限らず、精神障害者にもあると思う。私にもある。そのため一部の友達以外には知らせていない。隠しておきたい気持ちが大きい。精神障害者の場合、自分から伝えないと相手に伝わりにくい。でも、今の私には伝える勇気はない。将来減薬になり普通の生活ができるようになれば、あの時言わないでよかったと思うのでは…と考えるからである。

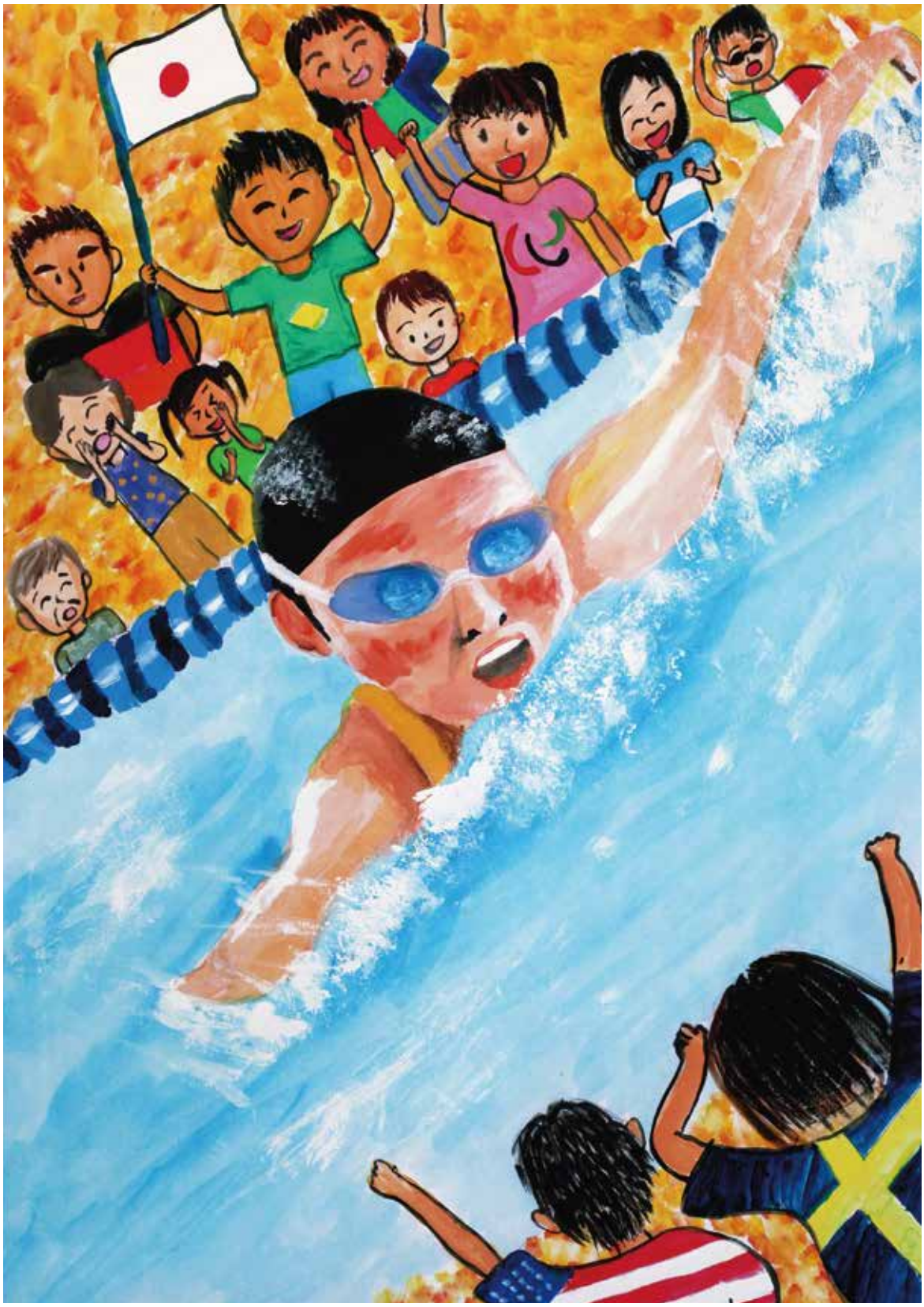
施設にいたら、障害者同士の交流がほとんどで、地域との交流も年に一回あるペタンクや二カ月に一回の折り紙教室だけである。そこも楽しそうに話しができるかと言えばそうでもない。交流という感じのものではない。以前のように友達と楽しく話したり、一緒にお茶をしたり、笑ったり等などがこれから先私にはあるのだろうか。フィフティー、フィフティーの交流って本当にできるのかな。本当にこの私に健常者と交流できる日が来るのだろうか。不安である。それでも私は大勢の人との関わりを通して差別のない「心の輪」を広げることを夢見ている。

元気になったら介護福祉士として、もう一度いろいろな人たちと関わりたい。何かをしてあげられることの楽しさ、うれしさをもう一度、この体で感じたい。そして何時か、家族と一緒に生活できること、元気にはしゃぐ自分に帰れることを願い夢見ている。

2016
優秀作品集
心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

小学生部門

香川県知事賞



観音寺市立観音寺小学校　四年

山本　更紗

2016
優秀作品集
心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

小学生部門

香川県健康福祉部長賞

高松市立古高松南小学校　二年

川西　琢仁

2016
優秀作品集
心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

小学生部門

香川県健康福祉部長賞

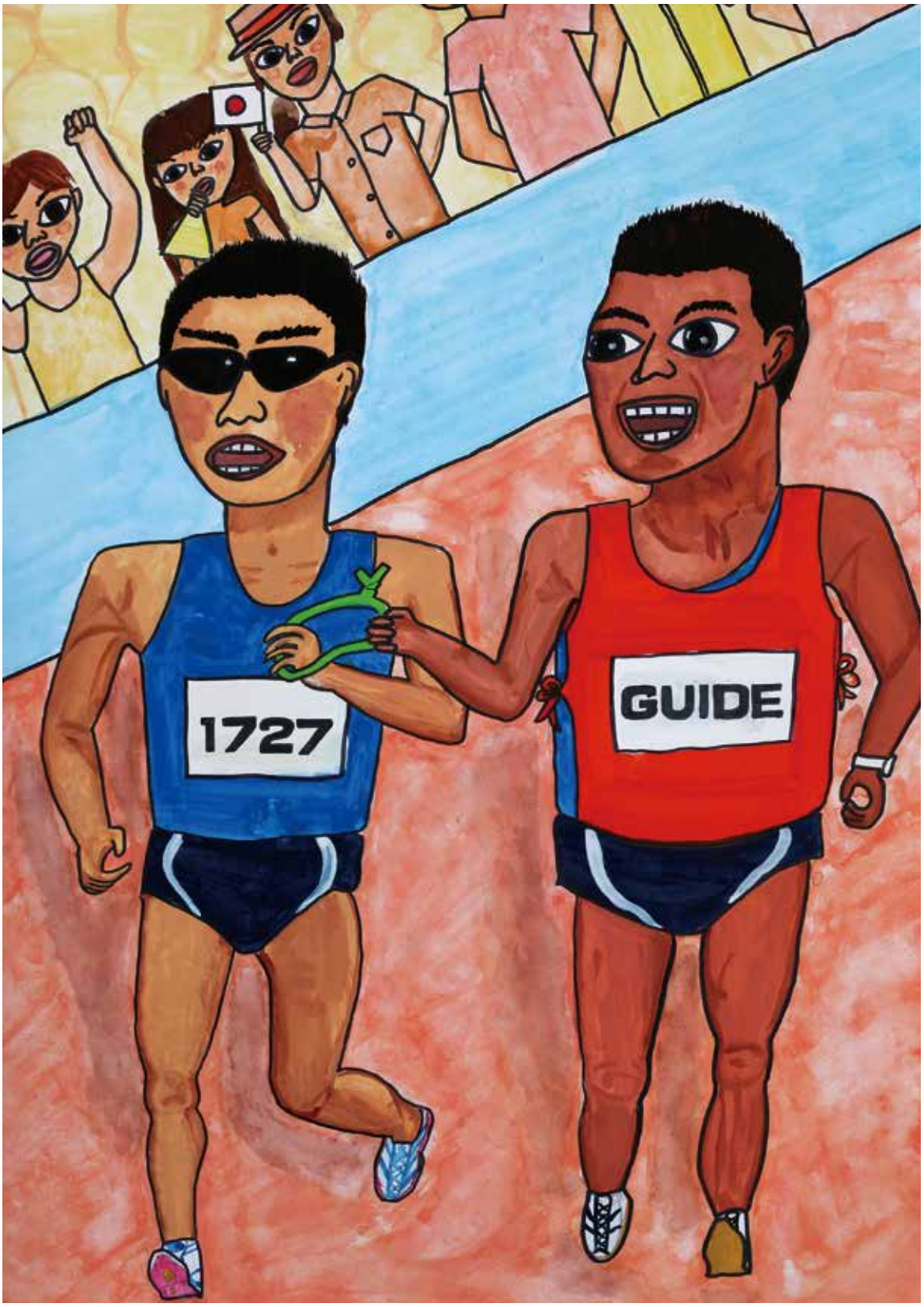
丸亀市立飯山北小学校　六年

佐藤　美凪

2016
優秀作品集
心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

中学生部門

香川県健康福祉部長賞



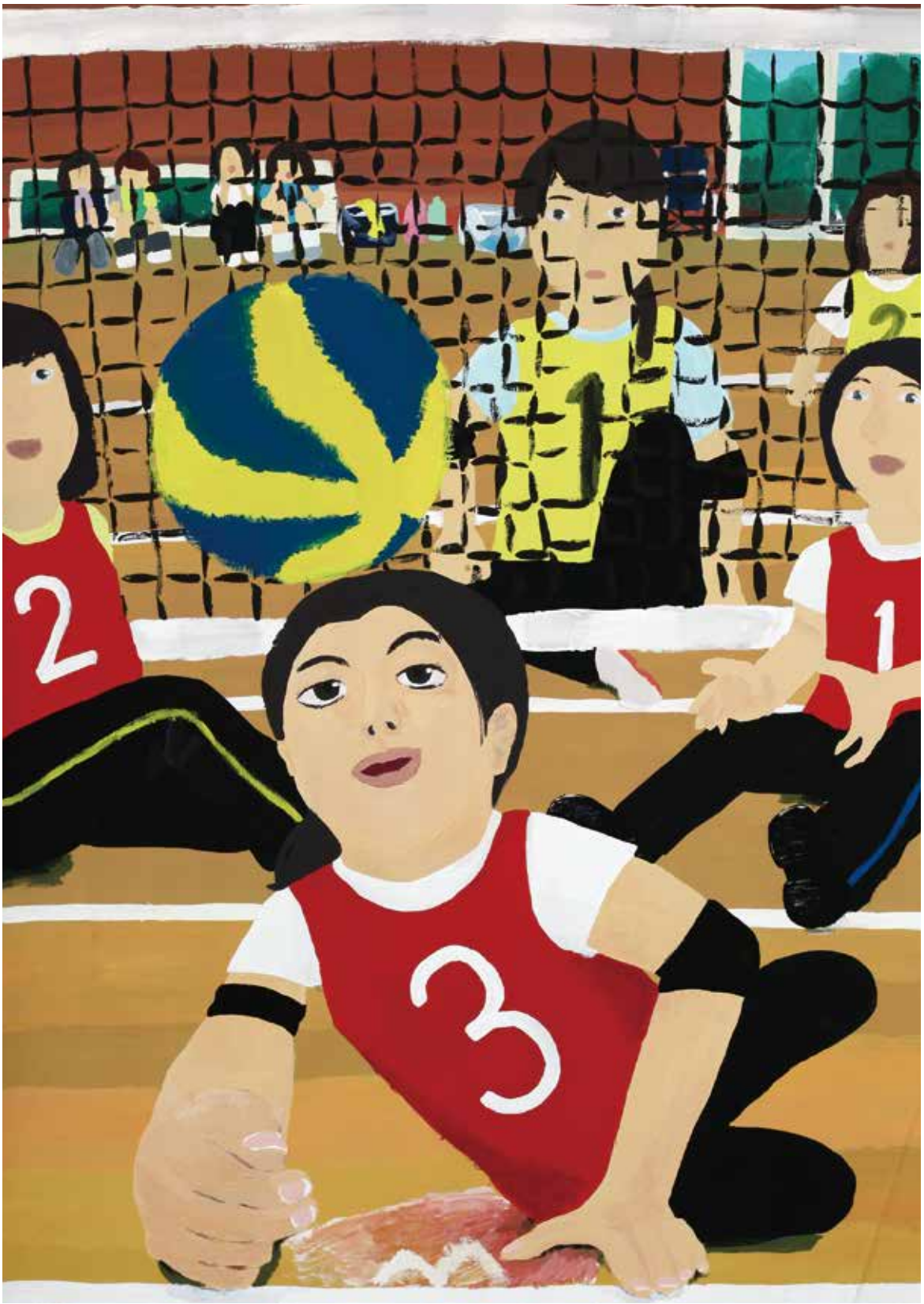
三豊市立豊中中学校　一年

犬井　美菜実

2016
優秀作品集
心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

中学生部門

香川県健康福祉部長賞



三豊市立豊中中学校　三年

吉田　花

小学生部門
審査員特別賞

高松市立亀阜小学校
六年　山中　迅

中学生部門
審査員特別賞

三豊市立豊中中学校
三年　石川　ひまり

2016

優秀作品集

心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

香川県 健康福祉部 障害福祉課

〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1番10号

平成28年11月発行